

黎明期の洋装とミシンについて

(第 3 報)

尾 中 明 代

On Western Style Clothes and Sewing Machines of their early period in Japan (Part 3)

by Haruyo Onaka

Part Two of this report discussed how Japanese women began to wear Western style clothes. In Part Three I want to consider the “Rokumeikan” period, when upper class Japanese ladies dressed gaily to vie with others in splendor, and the circumstances due to which the popularity of Western clothes either increased or declined.

After the Meiji Restoration, assimilation of thought, culture and system from the West influenced the way of thinking of both the government and the people. The idea of democratic popular rights was elevated and the Press became animated. People were dazzled by the advanced material civilization of foreign countries, and both materially and morally sang the praises of imported goods.

In the fifteenth year of Meiji, the then government advocated a policy of Westernization as helpful to the progress and acceleration of the revision of the commercial treaty over which the government had taken great pains.

This showed a tendency among high Japanese circles to wear Western dress and it was at this time that loud manners and customs became the vogue among some of them. Modern innovations were established in tailors' and dressmakers' shops and foreign tailors and dressmakers were employed to improve their technical skill in making high-class women's clothes. This period is called the “Rokumeikan” period.

Reactionary ultranationalism came to the front however, and a great deal of criticism was levelled at the Westernization and foreign policies of the government. As a result, the Ito Cabinet finally resigned in a body, ending the “Rokumeikan” period.

Consequently foreign clothes gradually began to disappear from among women and so, the business became dull. Up to the end of the Meiji period Western clothes among women in general did not make progress, except those foreign clothes worn by members of the Imperial Family and some other special people.

結 言

明治初期以来の急激な西洋文物の輸入によって、わが国の新思想は朝野ともに外来知識の影響下にあった。民権、自由の思想が高まり、言論界も活発となったが、一面外国の進歩した物質文明に眩惑され、西洋のものなら皆よいという考えの舶来万能の時代でもあった。なかには西洋人との雑婚による人種改良論、また學術用語は日本語を廃しすべて英語にせよなどの行過ぎた論まででた。

第2報で、女子が西洋服を着はじめたことについて述べたが、このような世代における、いわゆる鹿鳴館時代なるものと、当時の貴婦人の洋装について、その消長の経緯をかえりみようとする。

I Crinoline Style の時代

日本の貴婦人間に洋服が着用された鹿鳴館時代の style は bustle style であるが、この style が西欧において流行する前は、19世紀の半ばごろから着られた crinoline style であって、横浜開港当時の西洋婦人の服にもこれを見ることが出来る。bustle style に先だち crinoline style をここで省みると、1845 年ごろからあらわれ、1850 年に非常な流行をみた。はじめは petticoat を十数枚あるいはそれ以上を重ねて skirt の広がりを作り出していたが、1850 年代の終りにイギリス人によって crinoline による petticoat が工夫され、短時日のうちに流行したものである。しかし材料を crinoline にかえただけでは skirt の広がりも充分ではないので、crinoline に針金や whalebone で作られた輪を幾段も入れることで形づくった。



1 図

1 図は1850年の crinoline style である。

2 図は The Illustrated London News に掲載された Paris fashion の紹介で1864年3月のもの。

3 図は同じく1865年1月のものである。このころの skirt は bell 型となり、前より後の方を張らせている。



2 図



3 図

4 図は 1860年遣米使節の一行に加わった16歳の少年で愛称 Tommy とよばれた立石斧次郎が、ニューヨークのニブローズガーデンの舞踏会に招かれ、アメリカ婦人に歓待されている図であるが、この婦人たちの服装から当時アメリカでも frill の付いた crinoline skirt が流行していたことがわかる。

5図は日本人画家の目に映った外国婦人の服装で、遣米使節の随員がアメリカ婦人を訪れた折のさまを描いたものである。当時の婦人服について西洋新書によれば「華盛頓府風俗衣服の説」として次のように説明をしている。

「女は羅紗に限らず総て毛織の物を用ひず 絹布を以て服と為す 然れども亜米理加にては養蚕の法未だ開けず 絹糸は皆支那より運送し 仏蘭西にて織出した此国（注、アメリカ）へ持渡るなれば 貧しき者軽きもの等に至りては価高くして手に入りがたし 因りて夫らの者はみな唐更紗を用ゆれども 汚れ垢染たる衣類を着たるは更になし 服は筒袖なれども腰より下へ ホープスカレンスといふ鯨にて燈灯骨の如く拵へたるものへ布を覆ふて巻 大いなるに至りては裾の所差渡し三尺余に及ぶ 途中を往に少し引ずるほど長し 此の ホープスカレンスは十五六年前仏蘭西より流行始めし物にて 総て欧羅巴 亜米理加等にて衣服髪形のちとうの流行は仏蘭西よわ始まると云り」とあって、外国事情を知らない日本にこのような紹介をしている。

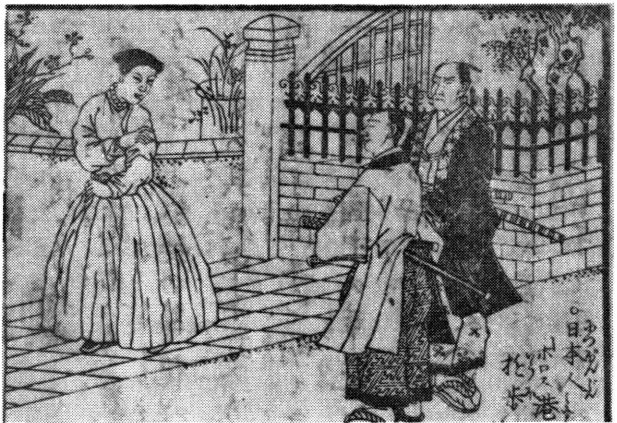
横浜開港見聞誌に描かれている横浜居留地の外国婦人は *crinoline dress* の上に房飾りのある方形の大きいショールを肩にかけている。

Ⅱ 外交政策と鹿鳴館時代

安政5年徳川幕府が諸外国と締結した通商仮条約は、わが国にとって不利益な条項が少なくなかった。なかでも関税率と領事裁判権の不公平は甚だしかったので、国際間に事件の起るたびにわが国は常に不利な立場にあった。たとえば明治11年、わが国禁を犯してアヘンの密輸入を企てた英人があったが、英国領事裁判はこれに無罪を宣した。下って明治19年英国船ノルマントン号が紀州沖で沈没したさい、英国人船長ほか乗組員はすべてボートで避難し、日本人船客23名はことごとく溺死するという悲惨な事件があったが、英国領事裁判は船長以下乗組員すべての無罪を宣するという有様で、そのつどわが国朝野の憤激は甚だしかった。通商条約改正は政府の重大な懸案であって、明治10年外務副島宗則はまず関税権の改正に着手しようとして、アメリカはじめ外国との交渉に当たったが、諸外国は未だわが国の法典は不完全であるとし、また国力文化も未熟であるとみて対等視せず応じる気配はなかった。明治15年1月、時の外務卿井上馨に条約改正の全権が委任され、井



4 図



5 図

上は全力を傾倒して各国公使と改正の議を進めようと努力したが交渉は困難を極め、井上の改正案もわが方の不利益を一挙に解消するものとはなし得なかった。国民の間には民権、自由の思想が高まり、その実現過程において政治知識は次第に育成されたが、また欧米の功利思想、実利主義が世を風靡し、わが国固有の精神文化および諸事物は、これを軽視して顧みないという弊害も生じた。

条約改正に腐心しつつあった政府は外国の風習に適合し、同時にわが国の文化のほどを粉飾宣伝して、外国人に対等の印象を与え条約改正の促進を側面から図ろうとする目的を以て、典礼、風俗、習慣等すべてに涉って欧化主義を唱した。鹿鳴館は上流社交の殿堂となり、内外の貴顕紳士淑女によって華やかな会合が催され、貴婦人たちは豪奢な衣服を身につけたのであった。第一次伊藤内閣のころを頂点とした約6、7年間をいわゆる鹿鳴館時代といい、日本の洋装に特殊な風俗をもたらした時代であった。

Ⅲ Bustle Style の時代

婦人服の流行は徐々に変化して次第に crinoline が省かれ、1870年ごろから bustle style すなわち townnure の流行をみ、これはちょうど鹿鳴館時代の style となって当時の上流社会の婦人間に流行することになった。錦絵に残された鹿鳴館時代の婦人服と外国のそれとを比較しやすいために style をあげてみる。bustle style は back hip に針金で編んだ bustle を用い、たっぷり使った skirt の布を loop up して美しい drape を作り上げた style である。これはのち 1890 年近くになると姿を消すのである。

6 図は 1873 年のパリにおける bustle style で train のある evening gown である。

7 図は 1875 年のもので白の taffeta に真珠で刺繍した布を用い、後に大きい bow を垂れている。側面なので back skirt に対して胸を張らせているのがわかる。

8 図は 1885 年の suit で skirt の裾に pleats の飾りがあり金属性のボタンが付いている。

9 図は 1880 年～1890 年における petticoat と bustle。



6 図



7 図



8 図



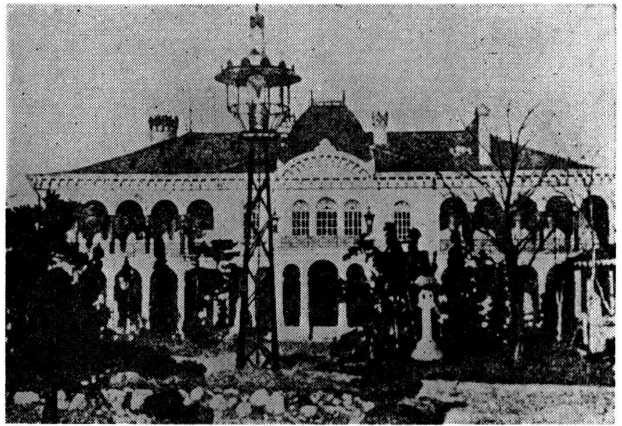
9 図

Ⅳ 鹿鳴館時代と女子の洋装

鹿鳴館は明治16年11月28日に開館式を行なった。ちなみにこの建物は明治14年に着工され、16年（1883年）に落成した白堊の二階建てで、建築費は14万円ということである。場所は山下町（現在の内幸町）旧博物館跡で現在の帝国ホテル隣にあたり、明治23年に華族会館となった。後に富国徴兵保険会社の所有となったが、昭和15年4月に取壊された。10図は当時の鹿鳴館である。

この開館式にさいして、その折の記事が次のように郵便報知新聞に掲載されている。

「鹿鳴館開館夜会の景況 紅葉ふみ分け鳴く鹿の声聞く秋の晩に際し 恰もよし鹿鳴館の開館あり 其式場の概略を記さんに予に掲載せし如く 正門には大國旗を掲げて弓形の緑門に菊花を点綴し 本館を中心に望んで路を左右に分ち 無数の球燈を其間に掛け連ね 或は山形をなして高く雲際には輝き或は直条或は曲線 紅白相映じて樹影の間に交錯す。館の



10 図

正面には瓦斯火光を以て鹿鳴館の三大文字を燃点し 燦然四辺を照らして白日の如し 真に是れ不夜の仙境なるべし。午後八時半より嘉賓来集し 須臾にして数百の馬車園中に充満せり 主客応接の礼終り衣冠巾幘相分れて各其室に入り 女子は左辺の一室に集り男子は玉突の所に集りて互に生平を語るあり疎闊を謝するあり 偶語する者あり 彷徨する者あり 各待つ所ある者の如し す

でにして奏楽の声起り 衆賓相携えて楼上の巨室に入り内外の縉紳貴女交錯して舞踏をなすを 囲み視る各々品評する所ある如し。(中略)此夜会合せるは皇族大臣参議を始め 内外の貴客貴女凡て五六百名なりしと見受けたり 外国婦人の衣裳は天鵝絨を着せるもの多きを見て或る紳商は近来巴里の新様を逐ふて天鵝絨の流行する模様あるよしを聞きしが生糸の売れずして不景氣の一原因をなせるも此の為なりと私語きけるあり 衆賓歓を尽して退散し了りしは午後十二時頃なりし」とある。

明治17年11月の公式礼服の内達には「場合ニヨリ西洋服装相用ヒ苦カラス」とつけ加えられており、次第に洋装が日本の貴婦人の間に用いられ、華やかな鹿鳴館時代を迎えることになるのである。

11図は、井上探景画皇国大平鑑舞踏会の図で、いずれも bustle style の婦人服がみられる。

次の画は明治20年ごろの貴女の生活などを描いたもので、いずれも bustle style の洋装である。

12図は揚洲周延画で上野公園開花の図。

13図は同じく周延画、上野において開催された第3回内国勧業博覧会館内の図で、両陛下下行幸啓の日のものである。



11図



13図



12図

14図は、貴女裁縫の図でミシンを使用している。

15図は二人乗り人力車上の婦人で、石版刷りである。



14図



15図

貴族間の服装は、舶来の服地を用いるなど次第に華美に流れたため、明治20年1月17日に次のような皇后思召書が出されたのであった。

「女子ノ服ハソノカミ既ニ衣装ノ制アリ 孝徳天皇の朝 大化の新政発シテヨリ 持統天皇ノ朝ニハ朝服ノ制アリ 元正天皇ノ朝ニハ左衽ノ禁アリ 聖武天皇ノ朝ニ至リテハ 殊ニ天下ノ婦女ニ令シテ新様ノ服ヲ着シメラレキ 当時固ヨリ衣ト裳トナリシカバ 裳ヲ重ヌル輩ヲモアリテ 重裳ノ禁ヲ発シキ（中略）近ク延宝ヨリコノカタ 中結ビノ帯漸ク其幅ヲ広メテ 全ク今日ノ服飾ヲバ馴致セリ 然レドモ衣アツテ裳ナキハ不具ナリ 固ヨリ旧制に依ラザル可ラズシテ文運ノ進メル昔日ノ類ヒニアラネバ 独り坐礼ノミ用フルコト能ハズシテ 難波ノ朝ノ立礼ハ 勢ヒ必ス興サザルヲ得ザルナリ サルニ今西洋ノ女服ヲ見ルニ 衣ト裳ト具ウルコト本朝ノ旧制ノ如クニシテ 偏ヘニ立礼ニ適スルノミナラズ 身体ノ動作 行歩ノ運転ニモ便利ナレバ 其裁縫ニ倣ハンコト 当然ノ理ナルベシ 然レドモ其改良ニ就テ殊ニ注意スベキハ 勉メテ我が国産ヲ用ヒンノ事ナリ 若シ能ク国産ヲ用ヒ得バ 傍ヲ製造ノ改良ヲモ誘ヒ 美術ノ進歩ヲモ導キ 兼テ商売ニモ益ヲ与フルコト多カルベク サテハ此挙却テ種々ノ媒介トナリテ 独り衣服ノ上ニハ止ラザルベシ（中略）人々互ニ其分ニ応ジ 質素ヲ守リテ 奢美ニ流レザルヨウニ能ク注意セバ 遂ニ其目的ヲ達スベシ 爰ニ女服ノ改良タイフニ当リテ 聊カ所思ヲ述テ 前途ニ望ミヲ告グ」

このようにわが国古来の女子服装について説き、服装の改良および国産品の奨励をされ、奢侈に流れた洋風化について戒めておられる。この洋服奨励の思召書によって上流婦人の洋服の流行はいっそう盛んとなり、思召書の意とは反対に華やかなものとなってゆく傾向にあった。

この間の業界は繁昌し、婦人服業者はミシンの設備、また外国人の裁縫師を雇い入れるなどで、日本の洋服裁縫の技術も向上して、高級なものを仕立てるようになった。

20年4月13日の郵便報知新聞に次のような記事がみられる。

「束髪洋服は固より婦人関係のもの大流行 大阪にては両陛下下行幸啓以後婦人の洋服束髪大流行にて洋服店俄かに五六十軒増加し、随て仕立職の賃金を非常に引上げたり。又近代に至りて婦人改良服とか婦人教育界とか総て婦人に関する改良の企て大流行なりと」

とあって当時の有様を報じている。

明治17年、伊藤博文、井上馨らの主唱で設立された東京倶楽部の趣旨は、「修好の媒介を謀り、内外の交際を親密にせんため、海外諸国に行はるる倶楽部に準拠し、会員を募集す」というものであったが、申込みは殺到という有様で、その5月に第一回の会が開催された。また伊藤博文夫人梅子、大山巖夫人捨松の諸氏の熱心な肝入りもあって、宮中の女官にも及び、貴婦人間の風俗を支配した。この年6月、貴婦人たちは婦人バザーを鹿鳴館に開き、7月にはダンスを Jansen 氏について稽古をする者もあった。

V 欧化主義の反動とその後の女子の洋装

欧米風俗習慣の一途な模倣も、それを見る外国人の間での印象は必ずしも当事者の予期したようなものではなかった。明治16年ごろから来日していたフランスの新聞記者ジョルジュ・ビゴー (George Bigot) によって日本人風俗の諷刺画も描かれている。

また当時すでに一部日本人の中にも、通常の生活から全く遊離した華美な外来服装に対して辛辣な批判の目を向ける者もあった。反動は明治20年ごろから国粋主義の抬頭となり、極端な西洋模倣が論難されるとともに、日本古来の国粋高揚の運動が展開された。明治20年4月20日永田町首相官邸に開催された仮装舞踏会での乱舞高唱などは、強い世論の非難を招くに至り、また道義頹廢のうわさも漸く高まって、政府の対外政策に対する攻撃は次第に激しくなった。20年9月、井上は職を辞するに至り、翌21年4月伊藤内閣は退陣した。ちなみに条約改正はその後歴代政府の苦心により完全な対等条約を成就することができたのは、第二次桂内閣の外務大臣小村寿太郎のとき、明治44年である。

明治21年8月23日東京日日新聞に次のような、鹿鳴館の貴婦人たちの洋装を揶揄した記事がみられる。

「一二の紳士淑女が首唱せし束髪と共に流行り出せしは女洋服にて既に己んこどなき筋よりの告諭もあり其に続きて伊藤伯爵の宮内大臣におはせし頃頻に奨励の手をつくされ 我国の文明を欧米と争はんは女子の品位を高むるにあり 其には従来深窓に潜みて人に遇ふて先づ羞るを徳とする亜細亜風の陋習を打破せざるべからず 而して其第一着手は舞踏会なり 音楽会なり 貴婦人令嬢の交際会なり 踊れ舞へ饒舌れ ソレには従来日本の服は不都合なり 必ずや洋服か 噫洋服々々開化の美風を真正に我国に注入して赤髯者流に長足進歩の一驚を喫せしむるは 真価に唯其れ婦人洋服の一事にある乎と 百方慫慂せられたるが其効験著しくして世は靡然として洋服の境界に進みたり 然るに之をなす一二年ドウも此頃はお腹が痛むナンだかお飯がおいしくない (中略) 奥様の御病氣は全くコルセットの胸部圧迫に原因致す 唯今の中御保養遊ばされんと容易ならぬ不自由も出来すべし (中略) 早速衛生論から持込んで日本服再登場と相成る向も少からず 蓋し一人の難渋は千万人の難渋なり 此より洋服の廃止論盛んになりて先日の利益談は今日種々の不便説となり 遂には府下の女洋服舗十が五六を減じたり 着手は先づ此にても可なるべし唯だ難渋千万なる此の流行に誘導せられて女洋服舗を新開したる店なり 従来男服専門の裁縫師では胸の締り 腰の広り何分思ふようにならずさり連今日人を遣りて留学させても目下の注文を弁ずるに足らずコートは給料は高くても仕立さへ上手にすれば取れる注文の利益で埋め合せは付くと見とうをつけて或は巴里に

倫敦に人を派し月給百万弗の裁縫師をエイヤッと雇ひ入れ船につんで是れ見よがしに鼻高々と帰って見ると右の仕儀従来の職工すらも裏刺の手を止めてハンケチの端縫に雇れるという運命なれば鼻高々の教師も精巧の職人も唯手を明けて遊ぶ計り 此に随ふ各地方の縫元も同じ苦情 折角の資本を棄てて西洋機の出来上る頃には早くも服地の末路となりて織るには織られず売るには売られず注文至らず客戸を跨がず己なん哉 (中略) 其方法の如何に依りては大に経済上の差響くこともあるべし 誘導の任に当る人々は其前に三省ありたき事なり」と結んでいる。

体を締めつける婦人服の corset の害については、外国でも論議され廃止の気運となったが、鹿鳴館時代の洋服に用いた corset も健康上の理由から論じられ、貴婦人間の洋装は次第に廃止されるようになった。

結 語

明治21年伊藤内閣の限陣のころから、婦人の洋装は次第にそのかげをひそめてゆき、婦人服業界は閑散となった。その後は皇族の御召料や、一部の人たち、また職業柄の洋服着用は行なわれたものの、一般女子の服装として発展をみるに至らず明治の時代は終るのである。

鹿鳴館時代を賑わした bustle style はやがて1890年ごろから bustle のない清楚な style へと変ってゆき、1914年 (大正3年) には第一次世界大戦の勃発とともに、服装も性能第一主義となり、体を締めつけていた従来の不衛生な corset を取り除き、軽快な short skirt の時代へと進み、次第に今日のような二十世紀の style へと発展してゆくことになるのである。

終りにあたり本研究調査について、貴重な資料を提供され御援助下さった文学博士遠藤武教授、東京大学吉田常吉助教授、また本学宮下孝雄科長、その他御助力下さった方々の御厚意に対し深甚の謝意を述べたいと存じます。

本研究の一部は昭和41年10月 第18回日本家政学会総会において発表した。

参 考 図 書

- | | |
|------------|--------|
| 遣外使節日記 | 大塚武松編 |
| 遣米使節図録 | |
| 嘉永明治年間録 | |
| 横浜開港見聞誌 | 橋本玉蘭齊誌 |
| 西洋新書 | 瓜生政和編 |
| 世界文化史大系 | |
| 維新日誌 | |
| 大政官日誌 | |
| 法令全書 | |
| 文化大年表 | |
| 風俗画報 | 東陽堂 |
| 女学雑誌 | 女学雑誌社 |
| 講座日本風俗史被服篇 | 遠藤 武著 |
| 明治事物起源 | 石井研堂編 |
| 近世錦絵世相誌 | 浅井勇助著 |
| 横浜浮世絵 | 丹波恒夫著 |

東京家政大学研究紀要 第7集

明治編年史

幕末明治新聞全集

Pictorial History of Costume Bruhn & Max Tilke

The Mode in Costume Wilcox

The Illustrated London News